



シニアライフアドバイザー
松本すみこ

南アリア代表、NPO法人シニアワークスRyoma 21理事。シニアライフアドバイザー、キャリアコンサルタント。早稲田大学第一文学部卒業。団塊・シニア世代の動向研究とライフスタイル提案、市場分析などを行い、講演・執筆など多数。大人のためのインターネットラジオ「あすのMC」。著書に「地域デビュー指南術～再び輝く団塊シニア」（東京法令出版）など。

している機体の数は増える一方、永井さんは部屋の天井に竿を通し、百数十機ほど洗濯ばさみでぶら下げている。富山さんも壁一面にずらつとかけてある。山田さんは入れ物も機体に合わせて自分で作った。こうして生み出した機体には格別の愛着がある。上昇気流に乗った紙飛行機を、カラスが追いかけたことがあった。どんだん上がったいき、カラスが諦めてしまったほど。すると風が変わって、戻ってきた。山田さんは「飛んでなくなるのはたくさんあるけど、帰っ



紙飛行機専用のカバンも自作

てきたのには感激した」と話す。富山さんも、1・5 km先のゴルフ場に落ちていたと届けてもらったことがあると言う。この飛行機は家に大事に置いてある。皆、そう

「視界没」な生き方

取材の最初に、現役時代の仕事をそれぞれ個別に聞いていたら、ほかの2人から「へえ」とか「そうだったの?」という声があがった。3人とも、お互いの現役時代や仕事について知るのは初めてなのだそう。普段の活動では話すのは飛行機のことほとんど。集まって自己紹介をするわけでもないの、フルネームを知らない人もいたりする。一緒に飛ばしながら、だんだん覚えていくらしい。

何かで知って参加したい人が突然やってきても、100円の参加費を払えば競技に参加できる。届け出が必要だからと規約を作ったが、会員数を数えたこともないし、会員リストも作っていない。人と競いたくないと競技会に参加しないで、見ているだけの人もいる。不思議なくらい、ゆるいサークルなのだ。

もともと山田さんが広場で飛ばしていたら、人が自然に参加して

いうエピソードをもっている。取材前は、折り紙の飛行機を飛ばして楽しむ気楽な遊びかと思っていたが、話を聞いてからは「簡単ですが、飛ばすのは難しい。奥



上昇気流に乗って高く上がると、見失いそうになる

きたという自然発生的な活動だからだろう。参加者が多かつたときもあるし、4、5人しか来なかつたときもあった。それでも、自分がやりたくてやっているから、集まろうが集まらなからうが、どうでもいいと思っていたそう。今でも、無理やり人を集めようという無駄な努力はしたくない。いつもオープンで来る人は拒まず。しかし、楽しいからやっている。

が深い、大人の遊びです」と言った永井さんの言葉に頷くことができた。
■ みずもと紙飛行機クラブ
<http://www7.biglobe.ne.jp/~mmpcc/>

また、団体行動をやっているようだが、基本的には個人競技。仲間との触れ合いもありながら、余計な気遣いが不要なところもいいのかも。今は20人前後の参加者で定着している。

リタイア後の仲間づくりや楽しみは、こうしたゆるい活動でいいのではないだろうか。気が進まないが、入会してしまつたので行かなければならぬとか、断れなくて仕方なくやっているという声を時々聞くことがあるが、それは考えなおしたほうがいい。

やりたくないことはやらない。これもセカンドライフの充実にとつて大事なことだ。もはや縛るものはないのだから。自分の気持ちに正直に、紙飛行機のように上昇気流に乗って飛んで行き、ときには「視界没」になつてもいいのである。

それをすでに実践している3人は「紙飛行機はお金がかからないし、外で体を動かすので健康にもいいよ」と揃って笑った。